
平成 26 年

6 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

中濃農林■ゆず ゆず園に「猪鹿鳥無猿柵」を設置

関市上之保地域では、地域振興作物としてゆず栽培に取り組んでいるが、近年、ゆずへの獣被害が増加し、苗木の枯死などが多発している。そこで、農業普及課では、被害軽減対策の一環として県農村振興課と連携し、6月13日、獣被害防止柵設置研修会を開催した。

研修会には、ゆず生産者、JAや市の職員等、約30名が出席し、獣被害対策の必要性や柵設置の留意点について県鳥獣害対策監の講義を受けた後、岐阜県型総合鳥獣害防止柵「猪鹿鳥無猿柵(ネットタイプ)」の設置実習を行った。柵設置後には、現地に自動撮影カメラを設置し、柵の防護効果を確認することとしている。



【ゆず園柵設置実習風景】

恵那農林■クリ 新規栽培者の技術習得に向けて！～「クリ新規栽培チャレンジ塾」開講～

東美濃栗振興協議会及びJAひがしみの主催による「クリ新規栽培チャレンジ塾」が、中山間農業研究所中津川支所で開講され、第1回目の6月8日には13名が参加した。

塾生は主催者から開講にあたりチャレンジ塾について説明を受けた後、農業普及課による東美濃栗産地の概要説明を受け、年間の作業内容を編集したDVDで学んだ。

また、ほ場では、農業普及課が現在のクリの生育状況や除草・排水対策・追肥などの初夏の管理、病害虫について説明した。

既にクリを植えている塾生からは、自園での病害虫の発生程度や早生・晩生の品種の混植による開花期の違いについて質問があるなど、活気ある講座となった。

この塾は、平成19年度から実施され、今年で8年目の取り組みとなる。来年2月まで全7回開催され、5回以上の出席者には最終回に修了証が授与される。

農業普及課では関係機関と協力して、来年には自園に多くのクリの苗を植えてもらえるよう塾生を支援していく。



■座学の様子(左上)

■病害虫について(右上)、生育状況について(下)それぞれ普及指導員から説明を受ける塾生

下呂農林■スイートコーン 第2回「下呂市スイートコーン研究会」を開催

スイートコーンの産地化に向け、6月9日に下呂市萩原町の実証ほにおいて現地研修会を開催した。

当日、農業普及課は参加した研究会員23名に対し、追肥方法等の栽培管理、難防除害虫アワノメイガの防除方法について説明し、またサル、ハクビシン、カラス等の被害を防止するための「猪鹿鳥無猿柵(いのしかちょうむえんさく)」の紹介を行った。

今後は、収穫適期の判断や、出荷物の目揃え、さらに販売先についての研修会を予定している。



【現地研修会の様子】

売れる農畜産物づくり

岐阜農林 ■ いちご、えだまめ、かき **産地地構造改革推進チームが始動**

6月13日、JAぎふ本店において、農業普及課とJAぎふ担当者による園芸産地構造改革支援事業推進会議を開催した。事業推進の核となる産地構造改革推進チーム構成員を決めて推進体制を確認し、産地改革プラン案及び本年度事業計画案についての情報共有と検討を行った。その後、各推進チームに分かれ、解決すべき課題や今後の計画などについて活発に意見交換を行った。



【各推進チームによる検討】

西濃農林 ■ 水稲 **機能性成分米 LGC ソフトの実証ほ設置**

県が今年から取り組む機能性成分米ビジネスモデル構築支援事業の一環として、低グルテリン米(体内に吸収されやすいタンパク質、グルテリン含有量が少ない米で、タンパク質摂取量が制限されている腎臓病患者への利用が期待されている)有望品種「LGC ソフト」の栽培及び実需者調査が計画されている。

養老町の生産者が新聞記事を見て栽培を希望し、県内2カ所での実証ほ場のうちの1ヶ所が養老町で設置されることとなった。

5月27日に田植えが実施され(13a)、農業普及課としては今後、生育・収量調査を実施し、この品種の特性を把握していく予定である。



【田植えの様子】

揖斐農林 ■ 茶 **上級茶仕上げ研修会 ～次年に向けて出品茶に魂を吹き込む～**

農業普及課は6月11日、(農)桂茶生産組合事務所において生産組合、農業経営課、農産園芸課、農業技術センター、揖斐川町役場、いび川農協等を参集範囲とした茶の仕上げ研修会を開催した。農業技術センター職員を講師に、製造された出品茶の官能評価を行い、これに合わせた篩調整と、総勢40名による手選別研修を行った。

6月17日には、出品茶から採取した見本をもとに再度官能評価を行い、仕上げ前と比較しながら出品茶、仕上げの評価を行った。また、次年に向けた茶園管理として出品茶園を巡回し、二番茶摘採後の整枝・せん枝についての研修を実施した。

同組合では手摘み茶5点を出品。管内全体では手摘み8点を含む計46点が岐阜県茶総合品評会に出品され、例年上位25点前後が関西茶業振興大会品評会に出品される。

農業普及課では、引き続き栽培管理について支援を行うとともに、本年の栽培結果、摘採・加工のデータから次年に向けての技術の組立てについて検討を進めている。



【写真左：官能評価風景、写真中：全神経を集中！選別作業、写真右：次年に向けての栽培管理検討】

農業経営課 ■ 夏秋なす **新技術導入広域推進事業（夏秋なす独立袋栽培）検討会を開催**

6月13日、中山間農業研究所中津川支所において、県機関を招集し、夏秋なす袋栽培検討会を開催した。夏秋なすは連作による土壌病害回避のため、3～5年の輪作体系で作付けを行うが、新規参加者をはじめとして、毎年新たな圃場を確保できない生産者も多く、生産振興上の大きな課題となっている。

このため、昨年度から表記事業を活用し、県下広域で夏秋なすの独立袋栽培の実証を開始した。今年は樹勢維持対策として、基肥主体（ロング肥料体系）から液肥主体（追肥体系）の施肥方法へ変更している。

今回の検討会では各地域の現地実証ほの進捗状況に関する情報共有や、支所内試験ほ場や中津川市内の生産者のほ場の視察を行った。



【夏秋ナス袋栽培現地検討会】

多様な担い手の育成・確保

郡上農林 ■ 担い手育成

夏秋トマト研修事業プロジェクト会議を開催

6月24日にJAめぐみの郡上本部にて、郡上地域に新たな後継者育成拠点を設立するため、生産者代表の園芸特産振興会夏秋トマト部会役員と若い生産者、農業法人代表、郡上市、JA、県の関係者の出席により準備会議が開催された。

今回は2回目で、事務局提出の設立計画案に基づき、運営主体、管理主体、研修方法などを検討した。今後具体的な計画を進めるため、研修施設チーム、研修カリキュラムチーム、研修生募集チーム等のメンバーを決めて、チームごとに分科会を開催し、計画を進めることになった。



【プロジェクト会議風景】

可茂農林 ■ 就農支援

夏秋なすコースで誘引作業を実習～JAめぐみの就農塾～

6月13日、就農塾「夏秋なす」コースの2回目の現地実習を実施した。

今回は誘引作業の実習で、基本的な技術の説明を行った後、実際の作業を体験した。作業的には、誘引する候補枝4本を選び誘引するものであるが、枝が裂けないよう誘引用の紐に巻き付けること、花・果実・側枝を一緒に巻き付けないこと、紐の結び方に注意すること等、ポイントの説明を行った。

受講者からは難しいとの声もあったが、何回も繰返すうちにコツを掴んだようであった。



【現地研修の実施状況】

東濃農林 ■ 担い手支援

水稲不耕起V溝直播栽培の導入に向けた動きかけ

多治見市甘原町の農家38戸で構成する集落営農組織「(有)甘原ええのお」では、水稲作の一層の低コスト化のため「不耕起V溝直播栽培」への移行を検討している。この技術は愛知県で開発され、本県でも既に100ha以上の導入実績があるが、中山間地域での事例は少ないため、農業普及課の支援の下、昨年度より農機メーカーの協力を得て実証試験に取り組んでいる。

冬期代かき後圃場を乾田とし、3月末～4月初に播種した結果、5月初めに安定して出芽し、その後本葉2枚となった5月下旬に入水した。思いのほか発芽が良かったため、昨年は茎数が慣行の移植栽培に比べ20%以上多く、本年は播種量を6kg/10aに絞って実証を行っている。なお、昨年度の収量・品質は慣行とほぼ同等であった。



【水稲不耕起V溝直播の実証】

現在経費の試算等を行っているが、移植苗が不要で種籾代のみとなるため、6 ha で年間70 万円程度のコスト削減が見込まれ、新たに機械を導入しても、トータルの生産コストは現状の経営から増加することはない、今後、集落営農を維持する上で有効な技術選択と考えられる。

飛騨農林 ■ 新規就農者育成 **新規就農者激励会を開催**

6月13日（金）に高山市において、指導農業士会、青年農業士会、飛騨農林事務所主催による「新規就農者激励会」を開催した。高山市・飛騨市・農業大学校・飛騨高山高校、農協等関係機関からも多数の出席があり総勢 63 名と盛大な激励会となった。

飛騨地域の新規就農者数は、ここ 10 年間で年間平均約 22 名で県全体の約 4 割を占めている。今回の激励会対象者数は 37 名で、当日はそのうち 19 名が出席した。

新規就農者の各々からは、「徐々に面積を増やし、将来は法人化を目指したい」、「若い人に農業の魅力を伝え父親を超える農業者になりたい。」等、今後の夢や目標などが語られた。



【夢を語る新規就農者】